

## 「僕」「私」「わし」 VS “I”



### —英語は 話し手の個性を どう表すのか—

日本語の1人称は、「私」、「僕」、「俺」、「わし」など多様であり、1人称によってキャラクター性が出る。例えば、「私」は丁寧で公的な印象を与え、「僕」は（特に男性の）柔らかく若々しい印象、「俺」は男性的でくだけた印象を伴う。一方、英語の1人称は「I（主格）、me（目的格）、my（所有格）」で統一されている。英語では話し手の個性や印象はどのように表現されるのだろうか。

上記のように、日本語の1人称は話し手の人物像を強く印象づける。この現象は、言語学者である金水 敏が提唱した「役割語」という概念によって説明できる。ある特定の人物像（年齢・性別・職業・性格等）を連想させることば遣い（語彙・文法・イントネーション等）、あるいはある特定の人物像がいかににも使用しそうなことば遣いを「役割語」と呼ぶ（金水 2003他）。

例えば、以下の例にみられる下線部が役割語にあたる。以下の3例は、論理的には同一の内容を表しているが、その話し手として想起される人物像は、それぞれ異なる。

- (1) a. おお、わしはお腹が減ってるんじゃ。  
b. ええ、わたくしはお腹が減っていますわ。  
c. おっす、おら腹が減っちゃっただ。

例えば、(1a)は男性老人、(1b)はお嬢様、(1c)は田舎ものなどの話し手が想起できるだろう。このように、日本語では間投詞や語尾などが役割語としての機能を持つことがわかるが、1人称も同様に役割語としての機能を持つのである。

それでは、英語の場合はどうだろうか。英語の1人称は上述のように統一されているため、1人称からキャラクター性などはわからない。しかし、英語にも役割語が存在する。関口(2016)は、ディズニー映画とジブリ映画を比較し、日本語と英語の役割語の対照研究を行った。この研究を通して、英語でどのような「役割語」があるのかを述べている。

まずは、女性が使うと「女らしい」とされる「女ことば」である「女性語」についてみてみよう。なお、関口は『現代社会学辞典』から引用し、「女らしさ」を「男社会から期待され求められる受動的な女性像」と定義づけている。関口は、英語の「女性語」の例として、次のようなものをあげている。

- (2) a. 感情表現（例：“Oh, dear” —おやまあ）  
b. 言いよどみ表現（例：“well” —まあ）  
c. 共感を求めるための付加疑問文（例：“It’s so hot, isn’t it?” —暑いわね）  
d. 強調表現（例：“I like him so much.” 私はとて彼が好き）

上記のように、英語では1人称そのものによって話し手の人物像が表現するのではなく、語彙や文法を通して「役割語」が形成されていることがわかる。

また、アメリカ英語とイギリス英語によって話し手のキャラクター性が表現されることがあり、発音などに色濃く現れる。例えば、ディズニー作品の『白雪姫』の主人公である「白雪姫」は、「一般アメリカ語」と呼ばれる標準的とされているアメリカ英語を話している。以下は作中のセリフを抜粋したものであるが、石黒(1992)によると、下線部でアメリカ英語に特徴的な発音がなされている。

- (3) a. “Just like a doll’s house.”（白雪姫：『白雪姫』）  
b. “What a little bed!”（白雪姫：『白雪姫』）（関口 2016: 35）

(3a)の下線部“doll”は、アメリカ英語の[dɒl]で発音されている。これに対し、イギリス英語で発音すると、[dɒl]となる。また、(3b)の下線部“bed”では、引きずり母音(母音を本来の長さよりも長く引き伸ばして発音すること)が見られ、[be: d]となっている。

一方で、王室に仕える執事は、プリンセスなどが使用するアメリカ英語とは異なり、イギリス英語を用いている。作中から抜粋した以下のセリフは、下線部に石黒 (1992) が述べているイギリス英語の特徴が見られる。

- (4) a. “I’ve never seen her before.”（執事：『シンデレラ』）  
b. “I can’t do this.”（執事：『白雪姫』）（ibid.）

(4a)の下線部は、アメリカ英語の場合は[r]を発音するが、イギリス英語ではない。(4b)の下線部は[kɑ:nt]と発音されているが、アメリカ英語なら[kænt]となるはずである。つまり、にはアメリカ、にはイギリス 上記のように、英語ではアメリカ英語とイギリス英語を使い分けてキャラクターの立場を表現していることがわかる。

次に、「スピーチ・スタイル」という特徴である。金水(2003)は、「役割語」について、「書きことばにおける『文体』（ライティング・スタイル）に対して、話しことばのスタイルだから話体、すなわちスピーチ・スタイルである」とも述べている。

「スピーチ・スタイル」の例として、ディズニー映画における「ヴィランズ」と呼ばれる「女性悪役」の表現が挙げられる。女性悪役のセリフには、先程述べた女性語に加え、以下の2つの特徴が確認される。1つ目は、命令表現の多用である。(5)のように、命令表現を使用することで、自身の地位の高さを示し、また相手を見下している意地悪な性格を表している。

- (5) a. “Take her far into the forest.”（女王：『白雪姫』）  
b. “Silence!”（継母：『シンデレラ』）

女性悪役のもう1つの特徴は、短時間の間でのことばの繰り返しである。

- (6) a. “Take that ironing and have it back in an hour. One hour, you hear?”（ドリゼラ：『シンデレラ』）  
b. “Touch the spindle, touch it, I say!”（マレフィセント：『眠れる森の美女』）（ibid.）

(6a)では、一文目の末尾の“an hour”のあとに、間髪入れずに“One hour, you hear?”と繰り返している。確認のために復唱しているというよりは、相手を煽っている雰囲気を出している。一方、(6b)では、語頭の“Touch”を文末でもう一度繰り返している。それに加え更に“I say!”と畳み掛けている。(6a)の疑問形の“you hear?”ではなく、平叙文で言っていることから、より強い口調になっている。これらでは、言葉を繰り返すことで、せっかちな性格も表しているのである。

上記から分かるように、命令表現の多用や発話の反復といった言語的特徴は、女性悪役の高圧的かつ攻撃的な人物像を効果的に表している。

以上より、日本語と英語では話し手のキャラクター性の表現の仕方が異なることがわかる。日本語の「役割語」は特に1人称や文末表現などで異なる役割語を作り上げている。これに対し、英語では、アメリカ英語とイギリス英語の使い分け、標準的でないことばや独特の話し方（スピーチ・スタイル）などで性格や特徴が表現される。1人称が多様でない英語でも、その他の手法によって登場人物の性格や立場を描き分ける工夫が存在しているのである。

#### 引用文献

- 石黒昭博 (1992) 『世界の英語小辞典』 研究社。
- 金水敏 (2003) 『くもっと知りたい！』 ヴァーチャル日本語 役割語の謎』 岩波書店。
- 関口秋香 (2016) 『役割語の日英対照 —ディズニー映画とジブリ映画における「女性語」を中心に—』 『東京女子大学言語文化研究』, 32-46.
- 見田宗介 (2012) 『現代社会学辞典』 弘文堂。

(渡邊来羽)

## CROSS WORD PUZZLE

タテのカギとヨコのカギから連想される英単語を以下のマスに当てはめて、太枠の中の単語を見つけ出そう。

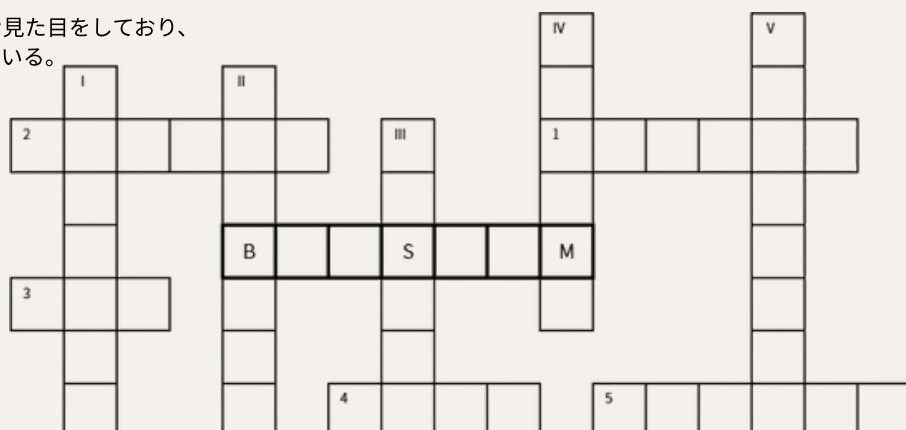
### ヨコのカギ

- 1: ギリシャ神話では神々の飲み物とされている。春はよくとある虫がこれを集めて巣に運んでいる。
- 2: 種子が発芽して間もない新芽のこと。栄養価が高い食材として世界中で広く利用されている。
- 3: 植物の「血液」とも言える水や栄養素を含む木の内部にある液体。春はこれを目当てによく昆虫が集まってくる。
- 4: 春から初夏にかけて開花する花。剣のような見た目をしており、日本では「アヤメ」として古くから愛されている。
- 5: 穏やかで心地よい風のこと。そよ風。

### タテのカギ



- I: 11月から2月が旬な野菜。ビタミンやカルシウムが豊富でありながら初心者でも育てやすいのが魅力の1つ。
- II: 太陽の光の束のこと。陽の光。春はちょうどいい温度で当たると心地よい。
- III: イエス・キリストの復活を祝うお祭り。また、春の訪れを祝う意味もあり、ウサギや卵がシンボルとされている。
- IV: 春の訪れを祝う日本の伝統行事。主に桜の花を觀賞しながら楽しむイベント。
- V: 英語で「卒業する / 卒業生」のこと。



Don't you love me?



## 学生Y 魔改造計画

### #1 ことばを科学するとは

本シリーズは、都市伝説が気になるゼミ生の山崎くんを、「宇宙人は存在するのか」といった問いに対して言語学の知見から科学的に検証できる人物に間改造することを意図したものである。ゼミ担当の三輪先生との対談を通して、本ゼミ生、山崎くんが成長していく過程をご覧ください。

(三) Issue 1の初回に引き続き、本コーナーの第2回です。前回では、宇宙人との対話が可能かどうかを考える上で、ヒトのことばを科学的に探究する方策として、内在主義という立場をとる「生成文法」という言語理論を紹介したよね。一言で言うならば、ことばを我々が外部に発した表現の総体ではなく、それらを生み出すことを可能にする、我々の中、つまり我々の脳内にある機構として捉え、それを探究する言語理論です。これと同等の言語システムを宇宙人が持っているれば対話が成立するし、持っていなければ対話は成立しない。以降は、我々の言語がどのような仕組みを持った機構であるかを、数回に分けてみていくことにします。

(山) 今回もよろしくお願ひします。

(三) 今回は人間言語固有の特性について考えていきます。というのも、人間言語にはさまざまな特性がみられるけれど、そのうちの多くは他の生物と共有しています。例えば、音声の主としてコミュニケーションがなされる点や、音声と意味・概念が対応している点などがそうです。後者はずっと否定されてきた考えですが、近年、鳥類のシジュウカラにも音と意味の対応づけがあることがわかってきました(鈴木(2025))。

(山) なるほど。構成性についてはよくわかりました。じゃあ、他の2つはどんな性質なんですか。

(三) 次に離散無限性について説明します。離散無限性とは、数の限られた音/語を組み合わせることで、無限の文や意味を生み出すことができるという人間言語を持つ特性です。どの個別言語も、語彙の数は有限ですが、そこから生み出される表現は無数なんです。例えば、(3)の文を長くしてみてください。

(3) 三輪は愚かだ。

(山) ...。「三輪は、とても愚かだ」とかですか？

(三) ああ！それもいいね！確かに、「とても」を入れると(3)の文より長くなるよね。しかも、「とても」を挿入できる数は1回だけと決まっていないので、

(4) 三輪は とても<sup>n</sup> 愚かだ (n>1)

というように、無限に長くできます。

確かにこれも離散無限性の性質を示しているんだけど、これは実は人間言語以外の言語にもみられるタイプの離散無限性なんです。「有限状態文法」といって、自動販売機にも使用されている形式言語でも、(4)のように無限な表現を生み出すことはできます。ただ、人間言語を持つ離散無限性は、もう少し複雑な形式をとりま

例えば、(4)の文を別の文の中に埋め込んでみてみようか。

(山)  
(5) a. 山崎は [三輪は愚かだ] と思っている  
b. 平子が [山崎が [三輪は愚かだ] と思っている] と言った

みたいな感じですか？

(三) そう。このように、元の文を別の文に埋め込むことで、どんどん長い表現を作ることができます。この埋め込みの数に制限はありませんので、埋め込みの操作を繰り返し適用することで、無限に長い言語表現を作り出すことが可能になるんです。これが、人間言語に固有の離散無限性です。

ちなみに、この「繰り返し適用する」ことを「再帰性(recursion)」といいます。チョムスキーは、近年、この再帰性こそが人間言語を他の言語とわける特性であると主張しています(Hauser, Chomsky and Fitch 2002等)。

(山) でも、実際の言語使用では(5)くらいの長さは出てくるにしても、そこまで長い表現なんか作りませんよね。

(山) へえ。そうなんですか。

(三) このような特性は確かに人間言語の一部ではあるけれども、これらを共有しているからといって、我々とシジュウカラはコミュニケーションが取れるわけではないよね。すると、宇宙人との対話の可否を議論するには、これらの共通点とは別に、我々の言語を言語たらしめる固有の特性を明らかにし、その特性を生み出す機構を持った宇宙人を仮想する必要があるわけです。

(山) なるほど。人間言語固有の特性には何があるんですか？

(三) 生成文法の提唱者であるノーム・チョムスキーは、人間言語に固有な特性として、「構成性(compositionality)」、「離散無限性(discrete infinity)」、「転置(displacement)」の3つを挙げました。

(山) 構成性、離散無限性、転置って何ですか？

(三) 1つずつ説明していくね。まずは、構成性。構成性とは、人間言語が階層構造をもっており、線条性(linear order)に依存するのではなく構造(structure)に依存して規定されているという特性です。構造依存性(structure dependency)という場合もあります。説明の前提として、線条性というのは、時間軸に沿ってことばの音声紡がれていく特性を指します。我々は主に音声を介して他者と言語コミュニケーションをしますよね。すると、線的な流れで音声をつなげていく必要が生じるわけです。

一方、構成性とはこの線条性と対となる性質です。我々の言語は、音声上は線条的な性質を示しますが、その内部では階層的な構造を持っていると考えられています。1つ、例を出してみよう。

(1) 年をとった女と男

という表現が表す状況を思い浮かべてみてください。

(山) はい、思い浮かべました。

(三) では、質問。年をとっている人の性別は？

(山) 女性と男性、両方です。

(三) なるほど。まあ、そうだよ。じゃあ、他の可能性はない？

(三) もちろん、そうです。現実には、話し手と聞き手の記憶や文処理能力に限界があるため、無限の言語表現が生成されることはありません。ただ、「作ることがない」けれども、「作る能力がない」わけではなく、言語能力に限定すると理論上は「作れる」という点が重要なのです。

(山) ふーん。そういうものなんですね...

(三) まあ、なかなか受け入れづらいかもしれないですね。気を取り直して、転置の解説に移しましょう。転置の定義を一言でいうならば、文中のある要素の意味解釈と音韻解釈の位置にズレが生じる現象のことです。なかなかピンとこないかもしれませんが、これは人間言語に溢れていて、特に英語学習者には馴染みの現象です。わかりやすい例は、能動態と受動態の対応関係にみられます。以下の文をご覧ください。

(6) a. Kotaro criticized Kenta. (能動態)  
(晃太郎は健太を批判した)  
b. Kenta was criticized by Kotaro. (受動態)  
(健太は晃太郎に批判された)

(6a)と(6b)の文は同じ出来事を表していますが、能動態である(6a)では批判する側である「Kotaro」に焦点が当たっているのに対し、受動態である(6b)では、批判された側である「Kenta」に焦点が当たっているという点で異なります。能動態の(6a)の文からもわかるとおり、「criticize」という動詞を使用する際は、動詞の右側、つまり目的語の位置に批判される対象が現れます。この点において、「Kenta」は目的語位置で意味解釈がなされているといえます。一方、(6b)では同じく批判対象である「Kenta」が、目的語位置ではなく、主語位置に現れています。目的語位置で意味解釈されているはずの「Kenta」の音形が主語位置に現れているということは、(6b)では意味解釈の位置と音韻解釈の位置との間にズレが生じているということになります。このような現象を転置といい、受動化だけに限られず、あらゆる言語の様々な言語表現において観察されます。

(山) もしかして、

(7) What did you buy?

のような疑問文も転置の例といえますか？

(三) そう。疑問詞を用いた疑問文も転置の代表例の1つです。(7)の疑問詞「what」は本来buyの目的語ですが、文頭の位置に現れていますよね。

(山) なるほど。わかりました。

(山) えーっ...そう言われても....

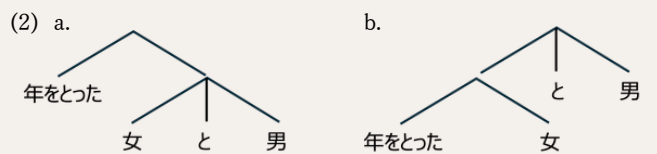
(三) まず、「年をとった」の次に「女」が続くわけだから、女性が年をとっているのは確定だよ。でも、男性の方はどうだろう。

(山) ああ！女性だけ老人の可能性ありますね！

(三) そう。(1)の表現には、女性も男性も年をとっている解釈と、女性だけが年をとっている解釈の2つの解釈が存在するんです。じゃあ、なんで1つの言語表現から2つの解釈が得られるんだろうか。わかる？

(山) わかりません。

(三) 答えは、(1)の表現が、音声上は、つまり線条的には、1つの表現だけれど、脳内の表示レベルでは異なる2つの構造を持っているからです。この例では、「年をとった」という修飾語句が「女と男」を修飾する構造と、「女」だけを修飾する構造が可能なんです。これを図で示すと次のようになります。



(2a)の図では、「女」と「男」という名詞が等位接続詞「と」によって結ばれ、それに「年をとった」という修飾語句が付加しているよね。それに対し、(2b)の図では、先に「年をとった女」という名詞ができて、それが「男」と等位接続されています。

(山) 確かに、最初は(2a)のような捉え方しか思いつかなかったけど、指摘されて(2b)のイメージが湧いてきました。

(三) でしょ。このように、線条性だけで考えると1つの表現でも、構造的に考えると2つの階層構造が想定できる。そして、それぞれの構造に対して異なる解釈が生じるため、1つの音声形式から2つの意味解釈が得られるというわけです。この例は、言語が線条性ではなく、構造に依拠した構成性という性質を持っている証拠の1つといえます。

(三) 以上が「構成性」、「離散無限性」、「転置」の解説になります。話を戻すと、チョムスキーはこれらの特性を人間言語に固有の特性であると考え、これらを実装可能な言語モデルを立てることを最初の目標として立てたわけです。また、それにより説明的妥当性、つまり人間言語の獲得における「プラトンの問題」を解決することを目指すことになります。ここからは先は、また次回のお話です。

#### 引用文献

Hauser, Marc, Noam Chomsky and W. Tecumseh Fitch (2002) "The Faculty of Language: What Is It, Who Has It, And How Did It Evolve?" Science 298(5598), 1569-1579.  
鈴木俊貴 (2025) 『僕には鳥の言葉がわかる』小学館, 東京.  
(山崎晃太郎)



#### ドイツ語の世界

日本語	ドイツ語
① アップルパイ	a. Apfelbaum
② ケーキ売り場	b. Apfelkuchen
③ 樹液	c. Apfelsaft
④ (店の)カウンター	d. Baumsaft
⑤ リンゴジュース	e. Kuchentheke
⑥ リンゴの木	f. Theke

① \_\_\_\_\_ ② \_\_\_\_\_ ③ \_\_\_\_\_ ④ \_\_\_\_\_ ⑤ \_\_\_\_\_ ⑥ \_\_\_\_\_

ここに日本語とそれに対応するドイツ語がある。同じ意味になるように組み合わせよう。

## なぜcan notではなくcannotなのか

私には妹がおり、時々、英語の質問を受けることがある。このとき、妹から、「なぜdoの否定形はdo notと2語になるのに、canはcannotと1語になるの？」と質問された。確かに、can以外の助動詞の否定形は2語で表されるのに、canの否定形はcannotやcan'tと1語で表される。少なくとも、中学校や高校の英語の授業ではそう習う。実際に、妹もそのように習ったために、上述の問いに至ったようだ。なぜcanだけが、can notのように2語にわけず、1語で示されるのだろうか。

実は、canの否定形には3種類の表記があり、cannotとcan'tに加え、can notと2語で表す用法も存在し、間違いではない。これらの3種類の否定形は一体何が異なり、どのような使い分けがなされるのだろうか。can not, cannot, can'tの3つをそれぞれ見ていく。

### ○ “cannot”と“can't”

まずは、馴染みのあるcannotとcan'tの用法からみてみよう。cannotとcan'tは、ともに助動詞canの否定形としてよく用いられるが、使いわけについては話し手の好みによることが多く、明確な文法上の違いはない。

縮約の仕方が異なるので、当然のことながら音韻上の違いが生じる。cannotの発音は2音節であり、否定語notが含まれているため、音声上canとははっきり区別することができる。そのため、否定形であることを非常に判別しやすい。

一方、can'tはアメリカ英語でもイギリス英語でも肯定形canと比べ、イントネーションを強く発音する。そのため、can'tのtの発音が聞き取れなかったとしても、肯定形との区別がつく。肯定形はよほどの肯定性を強調するときは強く発音するが、それ以外の通常の場合は弱形で発音される。イントネーションが強く発音されている場合は否定形、弱く発音されている場合は肯定形であると判断できるのである。また、cannotとcan'tはイントネーションにより肯定形canと区別することができるが、cannotは否定辞notを発音に含むため、否定をはっきり示すことができる。

「～れ」が、下一段活用の動詞連用形の「～れ」と偶然同音だったためそこからの類推で（このパターンは「ながれる→ながれ」「なれる→なれ」「つかれる→つかれ」などなど、多数）、「たそがれ」が、「たそがれる」の連用形から生じた派生名詞のように解釈（誤解）されて、「たそがれる」という動詞ができた、ということかと思えます。「類推」（時に、誤解）による語形成というのがポイントだと思います。

私が誤解している点がありましたら、教えてください。  
中山健一（一部、筆者により修正）

鋭いご指摘をいただき感謝しております。記事執筆者に代わり、三輪が返答させていただきます。

### ① 「インスタ映え」までの語形成

①はわざわざ逆成を持ち出す必要はないのご指摘です。確かに、形態論の概説書には、「名詞(N)+動詞(V) = 複合名詞」のパターンが掲載されており、中山先生が挙げられた事例（のいくつか）が、それに該当します。

しかし、伊藤・杉岡(2002)によると、それらは、Vの目的語(Object、時に主語)がNとして現れるV-O型NVと、Vの修飾語(Modifier)の一部がNとして現れるV-M型NVに分類されます。

- (1) V-O型NV：金魚すくい、雨降り、羊飼、物知り、夕暮れ
- (2) V-M型NV：手作り、1人歩き、仕事疲れ、黒こげ、石造り

(1)の複合語群は、「Nを／がVする」の形式に書き換えることができ、中山先生の例だと「人通り」と「日照り」が該当します。この種の複合語は、名詞と動詞の複合により複合名詞が形成されます。

一方、(2)の複合動詞群は、「Nで／によって／のように／からVする」というように書き換えることができます。伊藤・杉岡によると、このタイプの複合動詞はさらに、述語として使用する際に「する」に続くものと、「だ」に続くものの2種類にわけられます。中山先生が挙げられた例を分類すると、以下のようになります。

- (3) NVする：仁王立ち／手づかみ（する）
- (4) NVだ：土砂降り／都会ぐらし／学校帰り／冬着（だ）

これらの複合語は、動詞的要素の有無に違いがみられます。(3)の複合語は、接辞「するを伴うことからも、動詞的要素を備えていることがわかりますが、(4)の複合語は「する」を伴うことができず、動詞的要素を欠いた名詞的複合語であるとされます。

三輪(2026)では、「する」を従える複合語は、[[NV]-v]のように、[NV]という語根の複合体に、語全体のカテゴリーを動詞化させる要素「v」が付随したものと分析しました。この「v」が音声的に具現化すると、「する」として現れることとなります。

以上が、「名詞+動詞」複合語の詳細になります。件の「インスタ映え」ですが、(5)のように「する」を従えます。

- (5) このラテ、めっちゃインスタ映えするじゃん。

### ○canの否定形その1 “can not”

can notは、canに否定の副詞notがついたものである。canの否定形は3種類あるが、使われるのは対比や対称を強調させる場合である。例えば、you can go or you can not goである。ここでcanは「許可」の意味を持ち、この文は「行ってもいいし行かなくてもいい」という意味になる。肯定形のcanとその否定形のcan notで対比、対称の表現になっている。このような場合にcan notと2語で綴るのである。また、can notの形で使われる際は「～できない」という意味を持つことが多い。つまり、この時の否定の副詞notは、本動詞よりも助動詞canとの結びつきが強い。他の助動詞の否定形と比較してみよう。

- a. I must not eat snacks before dinner.  
(夕飯の前におやつを食べてはいけません。)
- b. She can not play a game because she must study for an exam.  
(テスト勉強をしないといけないため、彼女はゲームができません。)

a.ではnotが本動詞eatと結びつきが強い。「must」(～しなくてはならない) + 「not eat snacks」(お菓子を食べない) → お菓子をたべてはいけないという意味になる。一方、b.では「not」が本動詞の「play」と結びつき、「ゲームをしないことができる」という不自然な文になってしまう。よって、notはcanとの結びつきが強く、「can not」(～できない) + 「play a game」(ゲームをする) → ゲームができないという意味になる。このことから、他の動詞と比べてもcanは本動詞よりも助動詞canとの結びつきが強い。そのため、2語に分けるよりもcannotと1語にしてしまった方が理にかなっているのである。

歴史的に見ると、can notと2語で表記されていたものがcannotと1語に縮まり、さらに短縮したことでcan'tとなった。can notは「可能」と「不可能」の対比を強調する際に用い、cannotはcannot but doなどの決まったフレーズで用いられる。can'tはcan't seem to doなどのフレーズで使われる。

これまで述べたように、canの否定形は3種類存在する。can notは、使われる頻度が最も少なく、canとともに使われ、対比や対称を表す。cannotとcan'tは、同様に使われる。can'tとの違いは、発音の際に否定辞notが入るため、否定であることが判別しやすく、肯定形のcanと区別しやすいという点である。can'tは、発音の際にイントネーションが強く発音されることによって、否定であると判別することができるのである。

(植木綾那)

このことから、「インスタ映え(する)」は、[[NV]-v]の構造を持つといえます。

さて、元記事では、「インスタ」と「映える」の複合と同時に、逆成による「映える」から「映え」への語形成が生じていると述べています。上記の説明に基づく、この語形成過程は誤りであったと結論づけられます。そうではなく、「インスタ」と「映える」の複合により、「インスタ映え(する)」という複合動詞ができ、そこからさらに逆成(または転換)によって「インスタ映え」という複合名詞に至るとするのが適切であると訂正させていただきます。

### ② 「インスタ映え」から「映え」は逆成か

次に、「映え」が「インスタ映え」からの逆成によるというご指摘についてです。まず、中山先生は逆成が類推(誤解)に基づいてなされる旨を指摘されていますが、これは「本来、語の一部の接辞でない部分を接辞であると誤解し、削除してしまう」現象であると理解しています。しかし、「インスタ」は語の一部ではありませんので、上記の定義に該当しません。また、ここまで明確に接辞でない要素が接辞であると誤解されるというのは、少々想定し難いように思われます。また、このことから、「インスタ映え」から「映え」が逆成であるのご指摘には疑問が残ります。

先生は、「インスタ映え」から「映え」に至るまでの意味変化を理由に、前部短縮節を否定なさっています。確かに、ここでは映える対象の拡張という点で意味変化が起こっています。

しかし、意味変化によって前部短縮が否定されるかという点、必ずしもそうではありません。例えば、「春／夏／冬休み」から「休み」と短縮し、これ長期休暇の意味で使用することがあります。(7)では、「合宿に行こう」と言うのですから、ここでの「休み」は長期休暇を指しています。

### (7) 休みを利用して教習所の合宿に行こう。

このように、意味変化が起こるからといって、前部短縮が否定されるというわけではないと考えます。

### ③ 「誰そ彼」から「たそがれる」

最後に、「たそがれ」と「たそがれる」の語形成が逆であるのご指摘ですが、これはご指摘のとおりです。歴史的にみても、「誰そ彼(たそがれ)」ができたのち「たそがれる」ができたのは周知の事実でした。添削時に見落としてしまった私のミスです。

以上が、頂戴したご指摘への返答となります。言語学の議論の面白さを表現したいという思いで、あえて反論の形をとらせていただきました。改めまして、ご意見に対し深く感謝申し上げます。

### 引用文献

伊藤たかね・杉岡洋子(2002)『語の仕組みと語形成』研究社、東京。  
三輪健太(2026)『日本語の語彙的複合動詞にみられる非対称性と並置構造分析』『大みか英語英文学研究』29, 51-80。

(三輪健太)

## 読者からの声

前号掲載の「「映え」の歴史」に対し、文化交流学科の中山先生から以下のコメントを頂戴しました。

「The LinguistIC 2 「形態論特集 # 2」の記事、興味深く拝読しました。ただ、back-formationの例としての日本語「インスタばえ」(および、「ばえ」「ばえる」)、「たそがれる」の説明がわかりにくい、(もっと言うと、非常に失礼な言い方ながら、やや不正確)かと思えますので、非常に差し出がましいのですが、以下に私の考えを短く記したいと思います。ご参考になさってください。

back-formationの例としての「インスタばえ」の例の説明、少しわかりにくいですが。複合名詞「インスタばえ」自体は、通常の「名詞+動詞=複合名詞」のパターンの複合と、それに伴う後要素の連濁で説明でき、特にback-formationという概念をもちださずとも、説明できるように思います。語構成論的に、日本語で、「ひと+とおる=ひとどおり、どしや+ふる=どしやぶり、におう+たつ=におうだち、ひ+てる=ひでり、て+つかむ=てづかみ、とかい+くらす=とかいぐらし、がっこう+かえる=がっこうがえり、ふゆ+きる=ふゆぎ…などなど、普通に見られます。

一方で、非常におもしろいのは、ご指摘の後半、複合名詞「インスタばえ」から、名詞「ばえ」、動詞「ばえる」が生じた点です。前部短縮でも説明できますが、しかし、「インスタばえ」から意味変化が生じている(「ばえ」「ばえる」は、別にインスタに限らない)ので、これこそ、back-formationでない説明できないのではないのでしょうか。もちろん名詞「インスタ」と動詞「ばえる」がくみあわさって「インスタばえ」ができたわけではありません。もともと、後要素が濁音ではじまる動詞となる複合名詞は、多くないですが、全くないわけではありません。(東大+でる=東大で、こども+だます=こどもだまし、ネタ+ばれる=ネタバレ…)これらの複合名詞からの類推(誤解)で、「ばえ」「ばえる」が生じたのでしょうか。「たそがれる」の説明も分かりにくいですが。語源的には「誰そ彼」の漢字表記からわかるように、名詞が先で、そこから動詞「たそがれる」が生じました。これがしばしばback-formationで説明されることは間違いのないのですが、理由の説明としては、「たそがれ」の

## chill time の答えと解説

chill time の答え

- ① b ② e ③ d ④ f ⑤ c ⑥ a

～解説～

まず、語の構成について着目しよう。a. Apfelbaum、b. Apfelkuchen、c. Apfelsaftを比較すると、「apfel」という形態素が共通している。また、a. Apfelbaum、d. Baumsaftを比較すると、「baum」という形態素が共通している。ここから、a. Apfelbaumは、「apfel」+「baum」であることがわかる。では、「apfel」とは何か。この形態素が使われているドイツ語が3つあったように、日本語訳の方にも同じ表現が3つ使われているはずである。探す。「リンゴ、アップル」という形態素が3回出てくるので、「apfel」はリンゴを意味していることがわかる。つまり、英語で言うところの「apple」である。

次に、e. Kuchenthekeとf. Thekeを比較してみよう。一方は「theke」という1つの形態素から成り、一方はそれに「kuchen」という形態素が複合している。同様のペアとして②「ケーキ売り場」と④「(店の)カウンター」が見つかるので、Thekeは「(店の)カウンター」、Kuchenthekeは「ケーキ売り場」であるとわかる。また、「ケーキ売り場」が複合語であることを考えると、「kuchen」はケーキを意味していることがわかる。ここから、Apfelkuchenは「リンゴのケーキ」、つまり「アップルパイ」であると判断できる。残りの3組はどうだろうか。「apfel」はリンゴであることがわかっているので、a. Apfelbaum、c. Apfelsaft、d. Baumsaftのうち、消去法でBaumsaftが③「樹液」であることがわかる。

すると今度は「saft」と「baum」の意味について考える必要がある。そのために、要素の並び順について注目してみよう。[AB]という形式の表現である複合語では、右側の要素が語の中心となる「右側主要部の原則」が成り立つ(Issue 2の「形態論特集」を参照)。そのため、[AB]という複合語は「AのB」という意味を表すと類推できる。右側主要部の原則は、ドイツ語でも成り立つ。答えがわかっている複合語を振り返ってみよう。

- b. apfel+kuchen=①「アップルパイ」(リンゴ+ケーキ)
- e. kuchen+theke=②「ケーキ売り場」(ケーキ+カウンター)

これらでは語の中心が右側の要素となっており、ドイツ語でも右側主要部の原則が成り立っている。上記から、[AB]という表現は「AのB」を意味することがわかる。よって、d. Baumsaftは「樹液」、つまりは「木の液」と捉えられるので、「baum」は木を、「saft」は液体を表していることがわかる。これらのわかった要素から、a. Apfelbaumは⑥「リンゴの木」(リンゴ+木)、c. Apfelsaftは⑤「リンゴジュース」(リンゴ+液体)であるとわかる。

(市川 莉玖)



私は現代英語学科の英語技能科目である「Grammar」を担当しているが、そこでは毎回の授業後に学生からの質問やコメントを回収している。本連載は、学生から寄せられる質問の中から特に興味深いと感じたものを取り上げ、英語学的視点による解説を通して「Grammar」の授業を覗き見るものである。

授業内で、一般動詞が用いられる文を疑問文や否定文にする際に生じる助動詞do/does/didについて、その性質や使用法を扱った回があった。そこで、以下の選択式の穴埋め問題を出題した。

- Q: [ ] I said make you feel sad?  
 (a) Do what (b) What do (c) Did what (d) What did

紙幅のため解説は割愛するが、この問題に関し、授業後にある学生から次のような質問が来た。

私は「私が何と言ったことがあなたを悲しませた？」という解釈で解いてしまいました。もしもこの解釈なら「What did I said」でも正解になるのでしょうか？

確かに、日本語で考えると「私が何と言ったことがあなたを悲しませた？」という文は適格なので、英語でも

- (2) What did [I said ] make you feel sad?

としてもよさそうな気がしてくる。

しかし、残念ながら(2)の文は不適格な文である。なぜか。英語に限らず、人間の言語には、文中の要素を正規の場所から別の場所へ移動する現象がみられる(今号の「学生Y魔改造計画#2」の「転置」を参照)。例えば、(3)のWh疑問文はその典型例である。

それは、日本語のWh疑問文の性質に起因する。日本語では、疑問詞の文頭への移動が起こらない。移動が起こらないので、そもそも島の制約違反とはならないのである。

「いやいや、日本語でも、(15)のように疑問詞を文頭に移動させることができるじゃないか」と言われるかもしれない。

- (15) 何と私が \_\_ 言ったことがあなたを悲しませましたか。

確かに、(15)の文は、疑問詞の移動が起こっているにもかかわらず、適格な文である。

しかし、(15)にみられる疑問詞の移動は、「かき混ぜ」という英語の疑問詞の移動とは性質が異なる。かき混ぜとは、(16)にみられるような語順の入れ替え操作のことである。

- (16) a. Charlesが Ednaを 愛している。  
 b. Ednaを Charlesが \_\_ 愛している。

英語の疑問詞の移動が節を越える移動とされているのに対し、かき混ぜは節内の移動とされている(Saito 1985)。そのため、(15)では、「何と」の移動は、文主語である関係節の外を出ていない。

- (17) [S 何と 私が \_\_ 言ったこと]があなたを悲しませましたか。

つまり、島からの移動ではなく、島の中を移動していることになる。島を出ていないので、当然島の制約には違反しない。

このように、日本語で適格な文でも、英語では不適格になる文がある。その事実を知らないと、(2)のような間違いをしてしまう可能性がある。しかし、日英語の違いを細部まで授業内で触れる時間を捻出するのはなかなか難しい。実にもどかしい気持ちである。なので、このもどかしさを解消するために、今後もちょうくちよく本コーナーで発散させていただく。

引用文献  
 Chomsky, Noam (1973) "Conditions on Transformations," *A Festschrift for Morris Halle*, ed. by Stephen R. Anderson and Paul Kiparsky, 232-286, Holt, Reinhart and Winston, New York.  
 Chomsky, Noam (1977) "On Wh-Movement," *Formal Syntax*, ed. by Peter Culicover, Thomas Wasow and Adrian Akmajian, 71-132, Academic Press, New York.  
 Huang, C.-T. (1982) *Logical Relations in Chinese and the Theory of Grammar*, Doctoral dissertation, MIT.  
 Ross, John Robert (1967) *Constraints on Variables in Syntax*, Doctoral dissertation, MIT.  
 Saito, Mamoru (1985) *Some Asymmetries in Japanese and Their Theoretical Consequences*, Doctoral dissertation, MIT. (三輪健太)

- (3) Who do you love?

文頭の疑問詞whoは、意味的には動詞の目的語であるため、本来ならば動詞loveの後に現れるはずである。しかし、whoはそこから移動して、文頭の位置に現れている。このような移動現象は、英語に限らず、さまざまな言語で、そしてさまざまな構文で観察される。しかし、このような移動は自由なものではなく、移動が禁じられる領域が存在する。Ross(1967)は、移動が禁じられる領域を炙り出し、そこを「島(island)」と呼び、この島からの移動が禁じられる現象を「島の制約」としてまとめている。

- (4) 複合名詞句制約  
 語彙的な主要部を持つ名詞句に支配された文からはいかなる要素も取り出すことはできない。  
 (5) 等位構造制約(Coordinate Structure Constraint: CSC)  
 等位構造においては、(α)等位項(conjunct)を動かしてはならないし、(β)等位項の中に含まれているいかなる要素もその等位項の外へ動かしてはならない。  
 (6) 文主語制約(Sentential Subject Constraint: SSC)  
 ある節点S'がS'に直接支配されるNPに支配されているならば、そのS'に支配されている要素をそのS'から外へ動かしてはならない。(≒ある文の文主語からはいかなる要素も取り出すことはできない)  
 (7) 左枝制約(Left branch Condition: LBC)  
 より大きなNPの左端にあるNPは変換によってそのNPの外へ動かすことはできない。

(4)の「複合名詞句制約」とは、一言でいうならば、関係節や同格節は島をなしており、そこからの移動はできないというものである。(8a)に示すように、単なる名詞節をなすthat節からは疑問詞whoの移動が認められるのに対し、同格節(8b)や関係節(8c)からは移動ができない。なお、「S'」は(従属)節を表し、「NP」は名詞句を表すものとする。

- (8) a. Who do you believe [S' that John loves \_\_ ]?  
 b.\*Who do you believe [NP the claim [S' that John loves \_\_ ]]?  
 c.\*What do you know [NP the man [S' who broke \_\_ ]]?

(5)の「等位構造制約」は、等位接続詞で結ばれたまとまりである等位構造は島をなしており、その内部の要素の移動を禁じるものである。(9a)では「Yoko」と「Paul」が等位接続詞によって結ばれているが、これらを疑問詞whoに替えて、(9b, c)のように文頭に移動することはできない。

- (9) a. John loves [NP [NP Yoko] and [NP Paul]].  
 b.\*Who does John love [NP \_\_ and [NP Paul]]?  
 c.\*Who does John love [[NP Yoko] and \_\_ ]?

また、(10a)の等位接続詞で結ばれた2つの動詞句(VP)から、一方の内部要素を取り出すと、(10b, c)のように非文法的となる。

- (10) a. John [[VP plays the guitar] and [VP sings R&R tunes]].  
 b.\*What does John [[VP play \_\_ ] and [VP sing R&R tunes]]?  
 c.\*What does John [[VP play the guitar] and [VP sing \_\_ ]]?

(6)の「文主語制約」は、主節の主語の位置に従属節が現れる場合、その節(文主語)は島をなし、その従属節内の要素を移動させることを禁じるものである。(11a)は形式主語構文の例であるが、真主語であるthat節は主語位置に現れず、後置されている。後置された主語からは、(11b)のように、その内部の要素である目的語the guitarを疑問詞whatに替えて文頭に移動させることが可能である。これに対し、(11c)は真主語を主語位置に戻したものであるが、主語位置に現れる従属節からは疑問詞whatの移動が禁じられる。

- (11) a. It is likely [S' that John will play the guitar].  
 b. What is likely [S' that John will play \_\_ ]?  
 c.\*What is [S' [NP [S' that John will play t<sub>i</sub> ]] likely]?

最後の、左枝制約は、所有格を伴う名詞句の所有格部分が島をなし、そこからの移動を禁じるものである。(12)の所有格部分が、後続する名詞句songsに帯同して移動する(13a)は適格であるが、(13b, c)のように所有格部分だけが移動すると不適格となる。

- (12) a. John hates [NP [NP Paul's] songs].  
 b. John hates [NP [NP Paul's [NP wife's]] songs].  
 (13) a. Whose songs; does John hate t<sub>i</sub> ?  
 b.\*Whose<sub>i</sub> does John hate [NP t<sub>i</sub> songs]?  
 c.\*Whose<sub>i</sub> does John hate [NP t<sub>i</sub> wife's songs]?

以上が、島の制約の概要である。ここで、問題の(2)をみてみよう。(2)では、主語位置に現れる関係節内部から疑問詞whatが文頭に移動している。これは、関係節内からの移動という点で複合名詞句制約に違反しており、かつ文主語からの移動という点で文主語制約に違反している。これが、(2)の文が不適格となる理由である。ここで1つの疑問が生じる。なぜ、(2)の対訳である日本語文は不適格にならないのか。

- (14) 私が何と言ったことがあなたを悲しませたか。

## ご質問をお寄せください

日頃の生活や学習で疑問に思っていることや、悩んでいることはありませんか。皆さんが抱えていることばに関する疑問や悩みを「The LinguistIC」編集委員が解決します。お寄せいただいた質問は、本紙で取り上げて回答させていただきます。素朴な質問でも問題ありません。ことばに関して不思議に思っていることや、困っていることがあればなんでもご質問ください。

ご質問は、「【The LinguistIC】質問・感想フォーム」で合わせて受け付けております。右のリンクからフォームに入って、ご回答ください。



## Instagramを開設しました

この度、The LinguistICに関する情報を発信するためのInstagramを開設しました。刊行の案内や作成風景などを発信していく予定ですので、ぜひフォローをお願いします。

右のリンクからご覧いただけます→



## The LinguistIC 第3号

発行日 2026年4月15日  
 発行者 現代英語学科 三輪健太ゼミ  
 監修 三輪健太  
 記事執筆者 4名  
 レイアウト 市川莉玖

\*本紙は、茨城キリスト教大学2025年度「学生団体企画奨励金」の助成を受けて刊行しています。

※オンラインからでもご講読いただけます。右のリンクからダウンロードしてください。

最新刊はコチラから      バックナンバーはコチラから



## 現代英語学科三輪ゼミ開発 英文法用語検索アプリ

IC生限定



英語学習時のおともに



わからない英文法用語をササッと検索

先生やテキストの解説がわからない。それは英文法用語の理解不足が原因かもしれません。そんな時、スマホでササッと用語を検索して、英語学習の効率を高めましょう。

アプリ登録の際は、以下のリンクからインストールしてください。インストールの際に、スマホのほむ画面に保存すれば、いつでもどこでも知りたい用語を検索できるようになります。

<https://kenta-miwas-team.adalo.com/social-media-app>

